

国境を越えた高齢者と学生との交流

～施設が日本語教室に！～

藤沢市大庭

聖隷福祉事業団

聖隷藤沢ウェルフェアタウン藤沢エデンの園 一番館

生活サービス課 渋谷 湖美

1 はじめに

人生100歳時代と言われる今、「元気で長寿を目指していただく=健康長寿」が大切です。仕事や子育てなど長年注いできたものから離れた後も、それまでと同じ長さの人生を過ごさなくてはなりません。これまで得ていた「生きがい」「楽しみ」「社会とのつながり」「人と人とのつながり」をできるだけ継続していけることが「健康長寿」への鍵となるのではないのでしょうか。

ホーム内でも、入居者同士、入居者と職員、または個人的に外部の関係で得ている人もいます。しかし、以前と同じような多くの人との関わりはありません。大半の方が狭い範囲の付き合いとなってしまいます。

今年に入り、(株)Helte (以下 Helte) が展開している、ソーシャルビジネス (教育問題、自然環境、貧困、高齢化社会、子育て支援などといったさまざまな社会的課題を市場ととらえ、持続可能な経済活動を通して問題解決に取り組む事業) への参加の提案がありました。これが私たちが考える「健康長寿」への具体的取組の一案として、この事業に参画することとなりました。

2 事例や取り組みの紹介

【Helte の事業】

開発者が海外留学後の語学力の維持に苦勞し、オンライン学習は高額で受講することができませんでした。その時に米国の老人ホームで暮らす夫人との会話から、米国の歴史や文化、生き方、考え方、経験を知り、世代を超えた繋がりから多くのことを学ぶことができました。同時期に新興国の日本語学習者が多くいる事、ネイティブと話す機会がない事を知り、日本の高齢者の方々と繋がる方法「Sail」が構築されました。

【Sail を使用しての会話】

「Sail」は、日本語の先生が足りず会話の実践ができなかったり、経済的に勉強の場を得ることができない海外の学生 (以下 学生) と、経験豊かで、時間にゆとりができた日本の高齢者、この両者を繋ぐことを可能としたシステムです。テレビ電話のように会話ができます。

そして、新興国であるタイのいくつかの大学と提携しました。対象は日本語学科を専攻し、日本語で会話ができる学生です。日本では自治体・運営法人・介護事務所と契約し住民・利用者が参加し、学生と「Sail」で繋がる仕組みを作りました。

ツールは「Sail」が入った専用のタブレットです。これはセキュリティーをしっかりとするための専用のシステムとなっています。学生と入居者の情報、開始時間・終了時間、また、会話がスムーズに行われているか等を管理します。そして、学生と入居者がお互いに顔を合わせながら1回25分間のコミュニケーションを楽しむという内容です。学生は授業の一環として大学の教

員の指導のもと予約をします。入居者は学生の予約が入っている時間から、参加可能の時間を決定します。学生は、会話中は自身の力のみで実施、入居者はさまざまな話題を提供し、日本語が通じない時は表現を変えながら会話を進めていきます。会話の内容は、あいさつから始まり、自己紹介（タイの名前の発音が難しく、愛称で呼ぶことが多いです）、季節の花、食べ物、料理、住んでいる地域についての紹介、また俳句、書道など日本の文化に触れることもあります。

学生の中には、日本への興味だけではなく、日本国内企業や現地日系企業への就業希望者も多くなります。入居者は目的に合わせまた、学生の能力に合わせ言葉を使っていきます。

わからないときは、「もう一度お願いします」と言うように伝えたり、言葉遣いはマンガやアニメで覚えている学生が多く、丁寧な言葉を聞くことが少ない為、「うん」を「はい」「わかりました」と話す様、楽しい話題をしながら場面に応じて伝えていきます。

25分間はあっという間で、特に食べ物の話しは盛り上がりとても楽しそうです。入居者の中には現地の料理を実際作って食べた方もいます。毎回手作りの資料やたくさんの写真を事前に準備し、実践しています。

現在、よりスムーズに会話できる様、システムの調整や学生・入居者の情報（何を学びたいか、何を伝えることが得意か）を共有し運用する方法をHelte、入居者、職員で模索しています。

3. 考察

開始する前の説明会には10名以上の参加がありました。興味はあるが日本語を教えることが難しいと感じたからか、実際体験する方は4名ほどでした。しかし、体験した入居者全員が継続しています。これは、お互いが難しい会話ではなく、好きな食べ物や興味があることなど“日常の会話”を求めているからではないでしょうか。入居者はおひとりで入居している方が多くなります。その日にあった“ちょっと話したいこと”を話す相手がいません。孫ぐらいの学生との会話が“ちょっと話したいこと”を可能にし、継続に繋がっていると考えられます。

この事業はまだまだ完全ではなく、システムはもちろん、参加学生の選定方法・会話の進め方などHelteで検討したあと入居者で試し、感想を聞いて再度検討を繰り返しています。

入居者は、本来の学生との交流の他、Helteの若い担当や、ホームの職員と一緒にどのようにしたらスムーズに、また学生のための会話ができるのかを考えています。このことも入居者と共に、私達職員にとっても何かを得る機会だと考えます。入居してから数十年施設で生活していくなかでさまざまな刺激が必要です。できあがっているものを取り入れるばかりではなく、時代に合った外部からの新しい事業に、入居者同士・入居者と職員でチャレンジし、築いていくことが、これから必要になっていくのではないのでしょうか。

4. おわりに

学生がこの事業への参画により、語学力向上だけでなく、日本文化を直接知る機会や、高齢者への尊敬の念が醸成される機会となります。また、入居者にとっては、学生の成長を見守る喜び、社会との関わり、地域貢献（インバウンドへと繋がる可能性）、反対に海外の文化や生活を学ぶこと等により、「健康長寿」の達成が期待されます。まだまだ入居者の参画は少数ですが、国境を越えた高齢者と学生との交流が、笑顔あふれるホームづくりの大切な取り組みとして、これからも継続していきたいと考えています。